

第 26 回日本災害医学会でパネルディスカッションとシンポジウムに登壇しました (2021/3/15-17)

テーマ：東日本大震災から 10 年
会場：国際医療福祉大学、オンライン（東京、日本）

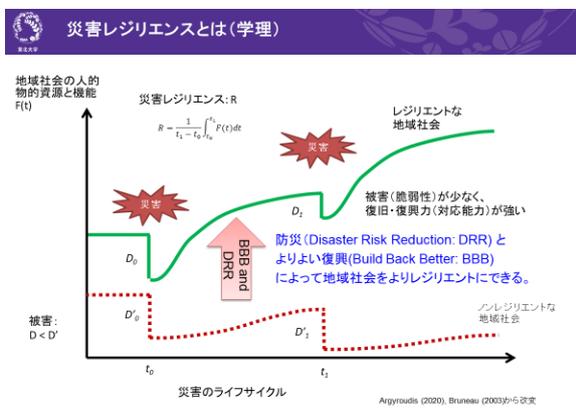
2021 年 3 月 15-17 日（月-水）に、国際医療福祉大学が主催する第 26 回日本災害医学会総会・学術集会において、災害医学研究部門 災害医療国際協力学分野の江川新一教授と佐々木宏之准教授がパネルディスカッション、ならびにシンポジウムでの講演を行いました。

日本災害医学会は、わが国の災害医療関係者が一堂に集い、災害医療をとりまくあらゆることについての知見と経験を共有し、災害における健康被害の低減、効率的な災害保健医療支援、つぎの災害への備えを強化する学術集会です。日本 DMAT をはじめとする災害時の派遣医療チームにかかわる保健医療従事者のみならず、消防、警察、自衛隊、行政などの職種の参加者も多く、まさに災害に対して多職種で連携して対応することを具現化しています。

パネルディスカッション 4 では、「東日本大震災から 10 年 多機関・多職種」というテーマで江川新一教授と東北大学病院石井正教授の座長のもと、佐々木宏之准教授が「多職種だからこそできる東北大学病院 BCP・BCM」について報告しました。東日本大震災で最も多数の人的被害を受けた宮城県では、保健医療、行政、消防などの災害対応を担うべき機関も大きな被害をうけて機能を失いました。多機関・多職種の連携として、何ができ、何ができなかったのか、10年でどのように改善したのかが討論されました。

特別シンポジウムでは、「東日本大震災から 10 年の総括（宮城・岩手・福島）」というテーマで、大会会長、大会副会長の座長のもと、宮城・岩手・福島で災害医療に深くかかわる演者が、10年間をひとつの通過点として、医療・保健の目からみた被害、復旧、復興について報告しました。江川新一教授は「東日本大震災から始まる災害レジリエンス学際研究」と題して講演を行い、東北大学災害科学国際研究所の防災（Disaster Risk Reduction）の考え方、『東日本大震災からのスタート 災害を考える 51 のアプローチ』の出版、仙台防災枠組における健康（Health）の位置づけ、災害レジリエンス学際研究の重要性について講演しました。

新型コロナウイルスパンデミックの影響で、ほとんどのセッションがオンラインで開催されましたが、新型コロナウイルス対応をしなくてはならない日常業務の間を縫って遠隔地から参加でき、発表や議論への集中度も高まり、後日見直すことも可能となるなどのいい面もあります。災害対応においては、顔の見える関係が大変大切です。学術集会を通じて、考え方を学び、議論することで、よりよい災害対応につながります。



災害レジリエンスとは

東日本大震災を振り返り、未来を見つめる本を出版しました。

編集方針

震災後10年経った「今(いま)」から震災を照射することで、今後新たな災害が起きた時、その10年後に生じる課題を先取りし、発生から1年後、3年後、5年後に有効な復旧・復興策をもってより計画的な再生を果たす道標となる

高校生や大学生にとって、震災とのあいだにある心理的距離感は大きく、その距離感は今後大きくなる一方である。また、防災・減災・危機管理にかかわる自治体関係者や企業人も、人員の新陳代謝や異動等で当時の記憶や経験を保持せずにそれら事業にかかわるケースもますます増えていく。

それをふまえ、震災後10年経った「今(いま)」の時点で確定している事実を「共有する前提」として認識し、そこから最新の知見へとスムーズにつながる議論とする。

東北大学災害科学国際研究所

B5版 225ページ

『東日本大震災からのスタート 災害を考える 51 のアプローチ』出版について

文責：江川新一、佐々木宏之（災害医学研究部門）